産業人と剣道の精神

剣道　中村龍夫

◇剣道との出会いから学生時代

私の剣道との出会いは、武道好きであった父の手引きによる。父は、長男の私に学問だけでなく武道を弁えさせようと思ったに違いない。竹刀の素振りは小学校に入ったころ教えられ、四年生のときには防具一式を与えられた。府立八中を経て旧制浦和高校に進むと剣道部に入り以降猛稽古に明け暮れた。春・夏・冬休みには父の紹介により町道場に通った。頑張ったというよりも、「よく鍛えられた」との実感であった。

多感の青春時代における猛稽古は「生き方」としての武士道や、禅に関する書物を読む契機となった。当時心に染みた吉田松陰の「一己の労を軽んずる(労をいとわない)」実践訓や、臨済の「随所に主となる」との教理は今もなお私の道標となっている。

昭和十九年、東大に入り、「七徳堂」に顔を出したが、学徒動員後の道場には二、三組がせいぜいだった。終戦後はGHQから剣道禁止令が出された。

◇尚武の気風の強い日本鉱業株式会社

昭和二十三年、日本鉱業に入社した。同社には古くから尚武の気風があった。私の初の勤務地である日立鉱業所の本山地区には京都武徳殿を擬した「尚武館道場」があり、少人数にはなったが戦後も引続き熱心な稽古が行なわれた。剣道の先輩は文字どおり多士済済。中でも故河合堯晴（元全日本剣道連盟会長）、庭野正之助（元一橋大学剣友会会長）、故佐々木陽信（元関東実業団剣道連盟会長）の各氏は、昭和四十九年から平成元年までの間、三代続けて社長・会長を歴任された。

まだ講和条約前であった昭和二十五年、木造ながら日鉱の本社が東京虎ノ門に建設された。これに関連し資材倉庫の二階を剣道場に改造した。髀肉の嘆をかこっていた本社の剣士はもとより、斯界の高名な諸先生方も多くお出でになり、戦後の剣道界に貢献した。

昭和三十二年、本社は五階建てのビルに建て替えられ、道場は、その後併設された体育館に移った。「東京のオフィス街の町道場」として評価され、周辺の官庁や会社、さらに市中一般の人も加わり「出入り自由・出会う人みな師匠」の「虎ノ門剣友会」が形成され、活況を呈した。

更に昭和六十三年、地上二十階の新日鉱ビルが誕生したが、道場は内外の剣道愛好者の念願が叶い、ツインビル西棟の地下二階の体育室として

存続した。右壁に神棚を擁し、正面に著名な彫刻家関頑亭先生の「金剛（こんごう）不壊（ふえ）」の額を掲げる中に、現役はもとより生涯剣道を目指す剣友諸兄の朝稽古の場として今日に至っている。

◇実業団剣道連盟と剣道に学んだこと

全日本実業団剣道連盟は、「剣道を通じての人造り」を標榜し、昭和三十二年に設立、翌年の第一回大会には、七十五団体が参加したが、平成十四年には三八七に及んでいる。加えて平成十年以降は、同連盟による女子剣道大会と高壮年剣道大会も開催され一段の充実発展をみている。

平成六年、私は図らずも全日本実業団剣道連盟会長に就任した。その際、ある記者から「産業人として剣道から得たものは何ですか。」との質問を受けた。咄嗟に次の三項目を答えた。

第一は「常に真正面から正攻法をもって臨むこと」。剣技は多様だが、基本は正眼の構え、正面攻撃が正当流だ。仕事においても小手先を弄せず、また難問といえども避けて通らない。

第二は宮本武蔵が言う「我ことにおいて後悔せず」である。反省は明日への糧として欠かせないが、嘆くだけの後悔に前進はない。前向きの工夫を

重ね全力でぶつかるならば、たとえ失敗しても悔いは残らない。

第三は「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」。ピンチには、自分の立場や名誉にこだわらない思考や行動力が道を開くと信じている。

以上、諸先輩の御指導を受け、剣道で学んだ精神で仕事に立ち向かう趣旨を述べたつもりである。

◇国力の衰退と精神的活力の源泉

最近の変化の潮流は凄まじく、多くの報道陣の論調は、何時の間にか国力の減退、経済の崖ぶち論に変わってきた。少子高齢化の中にあって、次代を背負う若者の学力・体力が国際的に劣位にあり、一部では勉学や積極的労働の意欲が欠け始めているとすら報じられている。

こうした憂うべき徴候に対処し、甲論乙駁の論議が交わされているが、その対応の基本は「国民的な精神世界のヴァイタリティは如何」ということにあるのではなかろうか。中西輝政教授(京大)は、「世界に適応する能力をもつ国」は、「たとえ悲観的な観察をしても、最後の元気を絶対に失わない文化や国民性を維持している」とし、「それはかつての日本文化の中に確固としてあったものであり、たとえば武士道や和の精神の神髄はこの点にあった。これこそ今の日本人がもう一度新たに身につけるべきもの

と思う」と述べておられる。

この武士道や和の精神は、剣道の基礎であり、背景でもあって、「剣の理法による人間形成」は不易の哲理であろう。今やすべてにわたって国際競争の世界、これに生き残るには構成員個々の勝負魂が強く要請される。そして勝負魂は、「千日の稽古を鍛とし、万日の稽古を練とする」ところに養成される。剣道の修錬然り、また産業人の仕事も同じである。

◇私事ながら過日父の墓前に、武道功労章を受章したことを報告した。御推薦賜わった全日本剣道連盟並びに長年にわたり剣道や仕事に御薫陶いただいた諸先輩に心から感謝の意を表します。